

在日朝鮮人子弟の教育

朝鮮人子弟の教育は、我が国に在る朝鮮人の子弟に對して、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

我が国に在る朝鮮人の子弟は、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

我が国に在る朝鮮人の子弟は、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

我が国に在る朝鮮人の子弟は、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

我が国に在る朝鮮人の子弟は、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

我が国に在る朝鮮人の子弟は、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

我が国に在る朝鮮人の子弟は、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

我が国に在る朝鮮人の子弟は、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

我が国に在る朝鮮人の子弟は、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

我が国に在る朝鮮人の子弟は、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

我が国に在る朝鮮人の子弟は、その民族の文化を傳へ、その生活の向上を期すことである。

在日朝鮮人子弟の教育

天龍村史より

戦前の三信鉄道建設工事（昭和4年^{ねん}8月着工昭和12年^{ねん}8月完成）、また、その後の平岡ダム工事に関わり、昭和10年^{ねん}～敗戦にかけて、当地域には多くの朝鮮人労働者が流入し、居住していた。

彼らのほとんどは、三信鉄道建設の頃には「募集」に応じて、また平岡ダム工事初期の頃には「官斡旋」、その後「徴用」という名目の強制連行も加わって、当地に来た人達であった。

この中の「募集」とは、日韓併合による土地調査事業によって国に土地を取り上げられ、生活基盤を失った朝鮮半島の農民達が、家族を連れて新たな職場を求め日本の労働者確保のための募集に応じ、後に「自由渡航者」と呼ばれる人達であった。彼らの子弟は赴任先地域の学校に編入することとなった。

昭和20年5月9日現在、平岡小学校には全学年で90名が在籍していた。この数字には、学校に行っていない児童、日本名を名乗っていた児童は含まれて居ない、実際はそれ以上の児童が平岡地区に居たことは間違いない。

全ての朝鮮人児童が学校に行けた訳でもなく、行けたとしても、その授業内容は日本人児童の内容と変わりなく、日本語での授業、教育勅語の理念、また勤労奉仕にかり出され行軍を行う姿は、日韓併合、強制連行などの憂き目にあい、「そんなことをした日本の為に兵士となって、戦場に行かなければならないのか、そんな馬鹿げた話があるか」と激しい怒りを感じていた。

学校に通わせることが出来ない悲しみ、通わせたとしても、朝鮮人としての教育を受けさせることが出来ない憤り、その感情が敗戦直後に民族教育を受けさせる場として、満島朝鮮人学校の設立につながった。

終戦後、多くの朝鮮人は祖国へ帰国したが、その一方で日本に留まることを選択した人達も少なからずいた、その理由は後述する。

村在住朝鮮人

昭和20年12月 140世帯 男537名 女140名 計677名

22年8月 男111名 女107名 計218名

昭和21年5月在日朝鮮人連名平岡分会が中心となり、朝鮮人の子弟達に朝鮮人としての教育を学ばせる為、満島朝鮮人学校を設立した。

学び舎は当初は民家を間借りし、その後現役場庁舎前に校舎を新築し、教師は曲

がりなりにも読書が出来る大人2名が担い、男子31名、女子34名の児童の教鞭をとった。

設立当初は生徒の年齢を考慮せず、朝鮮人としての教育を何も学んだことのない生徒達には全員1から学ばせる為、児童は全て1年生として就学させた。昭和23年には翌年からのダム工事再開の流れもあってか、朝鮮人全体で335人の居住者が報告されているのだが、その内訳を見ると「学生、生徒167人」と記されている。

参照「決議文」

昭和22年冬、下伊那在住の朝鮮人たちは、平岡村役場に1通の決議文を提出している。

「在日朝鮮人は、日本軍国者共が敢行した侵略戦争当時徴用と言う暴力手段によって拉致されて来たか、そうでなかったら悪逆無頼の暴圧と搾取のために、一切の生活力を強奪され、生きるに途なくして一片のパンを求めて日本の労働市場に買われてきたものであるために、祖国に何等の生活根據おも、持たないのである。此が我々が過去長い間、夢にも忘れることのなかった解放が訪れた今日尚、祖国に帰れないで日本に残留して居る理由である。申て日本に残留する朝鮮人の生活問題解決には、全的に日本当局に、其の責任があるべきである。

しかるに、今日迄日本当局は、朝鮮人に対して何等対策をも樹ってないし又、樹てようもしない。

それだけではない。

我々が過去一切の行懸を水に流して、朝日両国民間の友好親善関係の、橋渡しになることを期して、日本の人民と緊密な提携協力を為すために、日夜努力している我々の試みを妨害し、自らの失政とインフレの責任を我々朝鮮人に転嫁しようと策動し両民族を離間し対立抗争せしめようとして煽動している。

即ち最近顕著となった我々に対する、不法弾圧並びに朝鮮から引揚げてきた、もと植民地の戦犯官吏が警察署、検察庁や、裁判所等に、就職して、昔に変わらぬ偏見と屈辱と敵意に満ちた暴言が露骨に、しかも公然と行われていることは、その一例である。

此の様に、日本の指導者が過去長い間我々朝鮮民族に対して加えた、非人間的な野獣にも劣る行為を、少しも反省せずポツダム宣言の実施をさぼり占領軍当局の朝鮮人に対する好意を妬み、朝鮮人を厄介視し、却って朝鮮民族が解放された

ことを口惜しく残念に思い、朝鮮人に対して復讐感^{ふくしゅうかん}すらをも持っていると言う事実に対して、我々は、限りなき憤激^{ふんげき}を感じるものである。

以上の事情に照り合せて、左の各項を決議して、之が貫徹を期するものである。

1、日本人民と相提携協力し幸福を築き上げて、世界平和と民主主義確立のために、努力している我々の活動に協力せよ。

1、朝鮮人に対する為にする為の干渉と弾圧を中止せよ。

1、朝鮮人の生活解決の具体的対策^{たて}を樹よ。

1、朝鮮人を一般引き揚げ者と同様に処遇せよ。

1、朝鮮人に仕事を与えよ。

1、旧植民地から引き揚げた戦犯的官吏^{ひめん}を即時罷免せよ。

1947年12月7日

長野県下伊那郡在住

朝鮮人生活危機打開人民大会

代表 方 太石

平岡村村長殿

たとえ偏見や屈辱を感じ、場合によっては干渉、弾圧を被りながらも、彼らにはこの土地での生活を豊かにする以外に途^{みち}は無く、そこにこそ、なにを差し置いても、教育の場を設けようとする、彼ら自身の強い動機があった。

貧困のさなかに親たちは独力で学校をつくり、児童達は空腹を抱えながらそこへ通った。そうでなかったら「子供達は無学のまま育ってしまい、また自分達のように、つらい思いをする」と言う、切実な危機感の表れであり、当時の満島朝鮮人学校の存在とは、子弟らに祖国の言葉、祖国の文化を教えたいと願う在日朝鮮人たちにとっての、いわば苦難と希望の結晶であった。

昭和 21 年 5 月	朝鮮人学校設立 民家を間借り、その後新築校舎に移転
22 年 3 月	文部省通達により、朝鮮人学校の設立、運営が公認される 役場の調査によると、生徒数 男子 31 名、女子 34 名
23 年 1 月	文部省は一転して通達により、朝鮮人学校の設立、運営を 不承認とした。

「朝鮮人の子弟であっても、年齢に該当する者は日本人と同じ市町

村立または私立の小学校あるいは中学校に就学させなければならない」

- * 理由としては、国内的に民主化運動の激化、さらに国際的には朝鮮半島情勢の緊張と言う、当時の政治的社会的状況に対応したGHQならびに日本政府当局による、民族教育への圧迫であった。

23年10月19日 朝鮮人学校閉鎖

その後児童、生徒たちは平岡小学校、平岡中学校への編入を余儀なくされることとなった。

昭和27年

1952年の平岡ダムの完成に加え、後の佐久間ダム補償金問題が一段落するのをきっかけに、多くの在日朝鮮人がこの地を離村していった。その後も地域全体の人口低下に比例するように、彼らの人数もまた暫時的に減少していくが、それでもなお30年当時には、神原村、平岡村の双方合せて150名、その10年後でも74名もの朝鮮籍、韓国籍を有する人々が、依然この土地での暮らしを選択していた。

平岡中学教師の回顧

昭和30年の着任から8年間同校に勤続したある教師は、後に「平岡には朝鮮人の人達が大勢いて、中学校へも大勢来ていた。おそらく下伊那の中学校では一番多かったろう」と語り、「土地の人々の中に朝鮮の人もとけ合って親しくしていた関係からだろうが、生徒間に朝鮮人だからといって差別すということもなく、実にうれしく思っていた」として、ありし日のよき思い出を回顧している。けれども一方で彼は、次のようにも記していた。

「この生徒たちが一度卒業して就職するとか、結婚という社会生活に入るとそこには厚いカベがあつて、これは容易に破ることができなかった。この冷たい現実には私達教師にとっては許せない不条理であった。このため苦しみ、涙を流した卒業生を私は知っているが、いつになったら偏見のない国際融和が実現することであろう」